

ヴァンパイアがくえん
吸血鬼学園へようこそ②

凛江・作

りり
riri・絵



アルファポリスきずな文庫

目次

プロローグ

6

第一章

墨島学園高等部

8

第二章

修学旅行

42

第三章

クリスマスパーティ

55

第四章

ヴァンパイアの影

85

第五章

事件

105

第六章

仮面舞踏会

165

エピローグ

212

じん ぶつ しょう がい
人物紹介



プロローグ

「ごめん、ごめんね……、ひかるちゃん……、ホントにごめん……」

「大丈夫ですから！ 一気に吸っちゃってください！」

目をギョツと瞑り、震えながらひかるは叫んだ。

だって本当は怖くないわけではない。

自らの首筋を差し出し、今まさにヴァンパイアに吸血させようとしているのだから。

整った唇の隙間から白い牙が見え、ひかるは目をそらした。

その瞬間、プツリと皮膚が破られる感触。

（ああ、あの時と同じだ……）

痛みはなく、全身から力が抜けていく感じが妙に心地いい。

その感触は以前吸血された時のことを思い出させる。

だが今ひかるの首に顔を埋めているのは、あの時の彼ではない。

そう。

それは墨島学園生徒会長であり、学園のアイドルであり、また、ひかるの信頼するはとこでもある、墨島昴であった。

第一章 墨島学園高等部

十一月末。

墨島学園高等部の正門から校舎に続く並木道は、黄金色に輝く銀杏で鮮やかだ。

そしてその並木道は、今日も銀杏の鮮やかさに負けないくらい賑やかな朝を迎えていた。生徒会の親衛隊やファンたちが、いわゆる入り待ちをしているのだ。

彼ら彼女らの黄色い声を浴びながら、生徒会メンバーはいつものように登校する。

生徒会会長で学園の王子様的存在の墨島昂、副会長で紅一点、女王様のような緑山さおり、そしていつも桃谷ガールズと呼ばれる女の子たちを待らせている書記の桃谷泉、会計の青野獏は、つんつんした感じが可愛いと、まじめ好きや眼鏡萌えの女子に大人気だ。

彼らは時に会釈をしたり、にこやかに手を振りながら進んでいく。

その度に、さらに黄色い声が大きくなるのだ。

「あ、ひかるちゃん、おはよう！」

朗らかな昂の声に、少し前を歩いていた黒川ひかるは振り返った。

「昂さん、皆さん、おはようございます！」

ひかるも明るく挨拶すると、昂が破顔して駆け寄ってくる。

（うわあ……）

昂の笑顔はそれはもう爽やかなアイドル級のものののだが、ひかるはちよつとだけ顔をひきつらせた。

この学園に転校してきてそろそろ半年になるのだが、まだまだこの、学園の王子様が自分に向け寄ってくるシチュエーションに慣れないのだ。

周囲を見渡せば、あきらかに嫉妬、失望の顔がうかがえる。

昂が来れば面白がつて泉も寄ってくるし、さらに嫉妬されるのは目に見えている。

だが、転校当初のような罵詈雑言や中傷は全くと言っていいほどなくなつた。

昂がひかるを墨島家の遠縁にあたると公言し、大事にしている様子を見せつけていたからだ。

墨島学園に通う者、また家が墨島グループの恩恵を被っている者にとつて、遠縁であろうと、墨島家の縁者を攻撃することなんて許されない。

こうして昂がひかるを視界に入れるとすぐに声をかけてくるのも、いわゆる牽制の一つなのだろう。

「お、今日はポニーテールか。可愛いね、ひかるちゃん」

昂が満面の笑みで話しかけてくる。

「はは……、ありがとうございます」

ひかるはそれに、苦笑しながら返した。

昂の褒め言葉なんて慣れっこのだけけど、未だにこういう時どんな反応をすればいいのか正解がわからない。

だってあきらかにお世辞だってわかつているし、だいたい、今日はこのポニーテールのせいで登校が遅くなったのだ。

いつもは、この花道のような中を登校するのが嫌で、もう少し早めに部屋を出ている。でも今日はおしやれにうるさい親友のお眼鏡にかなわず、髪を結いなおしていたのだ。そう、女子寮の隣室の住人、相田美雪はひかるの親友である。



彼女はとても親切で（おせっかいとも言……）、ひかるが転校してきた時から髪形や服装にとてもうるさい。

でも仕方がない、こは超有名なセレブ校なのだから。

ここに転校してからというもの、ジャージや毛玉だらけの服で平気でふらふらしていた庶民のひかるが白い目で見られないよう、美雪が教育してくれたのだ。

今やひかるは、毎朝の美雪チェックがなければ登校できないほどだ。

「さすが美雪ちゃんチョイス。このリボンも清楚なひかるちゃんの雰囲気によく似合っているね」

「お褒めいただきありがとうございます、泉さま」

泉がひかるの髪にそっと触れると、美雪が社交用の笑顔で返す。

でも、桃谷ガールズが怖いから触れるのはやめてほしい……とは、言えないひかるであつた。

教室に入ると、友人の古林月子が「おはよう」と手を振ってきた。

この月子に加え、竹井奏絵、里井奈美、大山咲子は、あの、約四ヶ月前に起きた忌まわ

しい事件を通じて親しくなった友人たちだ。

奈美と咲子は恋人がいるためそちらを優先してしまうことが多いのだが、美雪、月子、奏絵、そしてひかるは、昼休みや放課後などグループで行動することも多くなった。

今では、あの事件が嘘だったように平和で楽しい学園生活を送っている。

「おはよう」

頭の上から声がして見上げると、藍崎煌が見下ろしていた。

「おはよう 藍崎くん。今日は遅刻しなかったね」

「うん」

藍崎煌は生徒会のもう一人の副会長である。

ただ彼は低血圧のせいか毎朝のように遅刻ギリギリなので、あの花道を通ることは滅多にない。

というか、花道を通りたくなくてわざと遅く来るのではないかと思える節もある。彼も昂に負けず劣らずのイケメン君なのだが、騒がれるのも寄ってこられるのも苦手らしいのだ。

煌はひかるの後ろの席なのだが、挨拶を終えても彼はひかるを見下ろしたまま動かない。

「どうしたの？ 藍崎くん。せっかく間に合ったのに、先生来ちゃうよ？」

「うん……」

煌は言おうか言うまいか躊躇するように口を開きかけたが、結局黙って席に着いた。

（変な藍崎くん……。でも、何か言いたかったみたいだね……）

彼は極端に口数が少なくて表情筋もあまり動かないのだが、最近ひかるはそんな彼の表情を読むのが上手くなったと思う。

今の表情は彼がちよつと恥ずかしがってる時だ……と思う。

ひかるは振り返ると、上目遣いで煌を見上げた。

だって彼はひかるより二十センチ以上背が高いのだ。

しかも、まだまだ伸びているらしい。

煌はひかるを見下ろすと、「べ……っ」と声にならない音を出して、手で口を覆った。

「藍崎くん？ どうしたの？」

ひかるがぎよんと首を傾げると、煌はとうとう横を向いてしまった。

「黒川……、それ、わざとやってんの？」

「え？ 何が？」

ひかるは煌にもつと顔を寄せようとして……、ハツと思いとどまった。そういえば、以前煌はよく、ひかるが匂うと言って顔を背けていた。最近『匂う』とは言われなくなったが、顔を赤くしたり背けたりするのは多くなった気がする。

なんだか言葉に出さずに臭いと言われているようで、それはそれで恥ずかしい。ちょうどその時、担任の先生が教室に入ってきて、ひかるは前に向き直った。

(よかった、臭いつて言われる前に先生来て……)

ひかるがそんなとんちんかんなことを考えている時、煌は煌で熱くなった顔を手であおいでいた。

(あいつ、あざとすぎんだろ……、上目遣いとか……)
もちろん、ひかるの辞書に『あざとい』なんていう言葉はない。

授業が終わると、美雪が「ひかる、帰ろう」と言って寄ってきた。

「ねえねえ、修旅に持っていく水着買いに行かない？」

「え？ 今日？」

「ええ。来週末に『エリーナ』の新作が入荷するんですって。予約しておこうよ」

「だったらまた後で行けばいいじゃない。今日はダメだよ」

ひかるはそう言うとい枚の紙をぺらりと美雪の顔の前に出した。

今週末二日間にかけて行われる後期中間調査の日程表だ。

「もー。ひかるはまじめなんだから」

「だって今回こそは総合一位取りたいんだもん。打倒、藍崎煌！」

前期の中間調査も期末調査も、実力テストや、抜き打ちで行われる小テストでさえ、毎回煌が一位で、ひかるは万年二位に甘んじてきた。

だけど、今度こそ……！ そう思ってた今頑張っているところなのだ。

美雪の誘惑に屈するわけにはいかない。

「だったら、一緒に勉強するか？」

頭の上から声がして見上げると、打倒する相手、藍崎煌だった。

「テスト勉強……？ 藍崎くんと……？」

「ああ……。俺、物理とか理系は得意だからある程度教えられるし。逆に、黒川は俺が苦手な歴史系得意だろ？」

「たしかに……。それ、いいかも」

そう呟くと、煌が「だろ？」という顔で見下ろしている。

「たしかに、みんな得意分野を教え合うのっていいよね」

「え？ みんな……？」

「美雪は帰国子女だから英語がめちゃくちゃ得意だし、青野くんは数学好きだね？ 月子は古文とか漢文とか飛び抜けてるし……」

話が聞こえたのか、月子が「なんで私？」という顔で振り返った。

獺も、「僕はライバルと慣れ合うつもりはない」などと格好いいセリフを残して席を立ってしまう。

「ライバルって……。藍崎くんと青野くんは生徒会の仲間じゃない。良いコンビなのにな」

「別に良いコンビでもないけどな。獺と俺は幼稚舎からの腐れ縁だから、まあ気心が知れるって感じではあるけど」

獺の後姿を見送って、煌がそう言った。

「幼稚舎から……？ 二人は幼稚舎なんだね」

「ああ。そういう意味で言ったら、昴さんも泉さんもそうだな。さおりさんとは遊んだことないけど」

「へえ……」

ひかるは煌や昴たちが幼稚園生だった頃に思いを馳せ、思わずにんまりした。

今も輝く美貌を誇る彼らなのだから、幼い頃もさぞかし可愛かったことだろう。

「その頃の写真とかって持って……」「持ってない」

食い気味に煌に言われ、ひかるはチェツと舌打ちした。

「そういうえば黒川にもいるのか？ 幼稚舎とか」

突然自分のことに話を振られ、ひかるは祖母と暮らした故郷を頭の中に思い描いた。

小さい町で育ったので、小学校も中学校もクラスメイトはずっと同じ顔触れだった。

そんな彼ら彼女らを、きつと幼稚舎と呼ぶのだろう。

でも、一番最初の、一番鮮やかな思い出は……

「……はーくん、かな？」

ひかるはポツリと呟いた。

そう、幼稚舎というなら、真っ先に思い浮かべるのは『はーくん』だった。

ひかるはまだ四、五歳の頃。

あの頃はまだ祖父も健在で、近所に住む祖父の友人が、孫を連れてよく遊びに来ていた。その、ひかるより少し年上の男の子が『はーくん』だったのだ。

『はーくん』と呼んでいたから、フルネームは知らない。

それに『はーくん』はひかるが小学校に入学する頃には引越してしまった。

でも優しい『はーくん』にひかるはとても懐いていて、彼もひかるを可愛がってくれていたつけ。

いくら祖父同士が友達だったとはいえ、小学校低学年の男の子が四、五歳の女の子と遊ぶのは面倒なことだっただろう。

でも『はーくん』は嫌な顔ひとつせず、ひかるの相手をしてくれていた。大きくなった今ならわかる。

『はーくん』はとっても素敵な男の子だったのだ。

『はーくん』と呟いたまま黙ってしまったひかるに煌は少し仏頂面で、

「で、どうすんの？」

とたずねた。

「え？ どうするって？」

「勉強会。すんの？ しないの？」

「あ、そうそう、勉強会ね。青野くんは帰っちやったけど、美雪と、月子と……、あと誰を誘おうか」

教室を見回したひかると目が合つて、美雪は「あーあ」と言わんばかりの呆れ顔でこちらを見た。

だって話が聞こえているのは美雪と月子だけじゃないのだ。

気づくと、ひかると煌はじりじりと近寄ってきていたクラスメイトたちに囲まれていた。

「ねえ、話聞こえてたんだけど、藍崎くんが勉強教えてくれるの？」

「えー、じゃあ私にも教えて」

「私も、私も」

と、みるみるうちに人だかりができる。

女生徒たちに囲まれてしまった煌は、結局、うんざりしたようにこう言った。

「いや、やっぱり勉強は一人でやるものだよな」



「藍崎くんさ、絶対ひかると二人で勉強したかったんだよね」

「それ、激しく同意。ひかるったらものすごい鈍ちなんだもの」

「もうさあ、私たちでくつつけちゃおうよ」

「いいね。修旅で決行がいいんじゃない？」

「一部屋に二人で閉じ込めちゃうとかあ？」

ひかる本人の目前で恐ろしい相談をしているのは、美雪、月子、奏絵の三人だ。

今ひかるを含めた四人は学園の近くのカフェで試験勉強をしているはずなのだが、まじめに取り組んでいるのはひかるだけである。

恋バナが大好きでずっと前から恋人が欲しいと言っていた奏絵や、勉強よりファッションに興味がある美雪ならまだわかる。

だが、以前はひかるに対抗意識を燃やして学年順位に固執していた月子まで加わっているのはどうしたものだろう。

「ひかる、その後藍崎くんととの進展はホントに何もないの？」

「だから、ホントに何もないから。藍崎くんとはただのクラスメイト」

ひかるはもう何十回目かわからないほど返した同じ答えを、再び繰り返した。

三人の言うその後というのは、四ヶ月前の舞踏会の後のことである。

あの舞踏会で煌はパートナーとしてひかるをエスコートしてくれたのだが、それは事件のこととか、色々あったせいなのだ。

「だいたい、私のこと言うなら美雪や月子だって生徒会メンバーがパートナーだったよね？」

そう、あの舞踏会で、生徒会メンバーは事件の関係者を優先してエスコートした。

美雪は泉、月子は獺がパートナーだったはずだ。

それなのにひかるだけ詰められるのは心外である。

「ええ？ 泉さま？ ないない。私桃谷ガールズに睨まれたくないし。それにああいう中性的美少年は好みじゃないの」

「私もないわー。私カリ勉タイプは無理。私とキヤラ被るでしょ？」

「二人とも、贅沢すぎ！ 誰もがエスコートしてほしくてたまらない方たちのパートナー

になっておきながら、何を選ぶ方の立場で話してるのよ」

奏絵が憤慨しているが、美雪も月子もどこ吹く風だ。

「仕方ないじゃない。私が好きなのは筋肉男子なんだから」

そう言うとき美雪はうつとりと遠くを見た。

生粋のお嬢様である美雪は、実はマツチヨ系男子が好みなのだった。



十二月に入った。

ひかるはいつものように少し早めに登校する。

生徒会メンバーより早めに来れば、あの賑やかな花道もまだできていないのだ。

それに今日は、いつもより早く行きたい理由もあった。

「すっかり寒くなったわね」

並んで歩いてきた美雪が、首に巻いたマフラーで鼻の辺りまで隠す。

「そんなに寒い？」

ひかるはそんな美雪を見て笑った。

ここ墨島学園高等部のある島は、ひかるが生まれ育った町よりずっと温暖である。

ひかるはコートも着ていないしマフラーもしていないが、ちつとも寒いなんて思わなかった。

「仕方ないじゃない。私、去年まではシンガポールにいたんだもの。常夏の国から来たのよ？」

美雪はそう言うとき、さらに体を縮ませた。

「でも、そのわりには色白だよな？」

「あたり前でしょ？ 若いうちからきちんとケアしないと、年取ってからシミになっちゃうんだから！」

「たしかに……。美雪、美白命だもんね」

銀杏の並木道を抜けると、大きな講堂がある。

その前に掲示板があつて、人だかりができていた。

先週行われた後期中間考査の結果が掲示されたのだ。

ひかるが早く登校したかった理由もこれである。

「どれどれ……？ ああ、また二位かあ……」

掲示板の前に、ひかるはがつくりと肩を落とした。

今度こそ総合一位を取りたくて頑張ったのだが、やはり今回の一位も藍崎煌だったのだ。二位のひかるに次ぐ三位は青野模、四位は古林月子。

この辺りもいつもと変わらず、といったところである。

放課後、ひかるは美雪と一緒に制服のままショッピング街に来ていた。

テストも無事終わったので、修学旅行の準備をするためだ。

墨島学園高等部では、クリスマスから年始にかけて修学旅行（一、二年生のみ）がある。なんと、豪華客船クルーズ。

大型客船を貸し切って九日間の船旅を楽しんだ後、墨島グループ所有の南の島に上陸する予定だ。

生徒たちは船上で、クリスマスパーティと、年越しの仮面舞踏会に参加する。

その他にも様々なイベントやアクティビティが用意されているらしい。

到着先のリゾートホテルでは墨島一族とグループの年始のパーティが開かれることになったっており、ひかるは、この機会にまだ見ぬ祖父に会えるかもしれないと楽しみにもしていた。

「ひかるひかる、これはどう？」

美雪が大人っぽい黒のビキニを持ってきた。

「うわあ、布部分少ないけど、美雪スタイルいいから似合いそうだね」

「ええ？ 何言ってるのよ。ひかるにどうかってことよ」

「はあ!? 私!？」

美雪が制服の上からひかるの体にビキニをあてがう。

「うん、ひかるって清楚なイメージだけど、こういう大人っぽいのもイケると思ったのよね」

「ええ？ 無理無理無理！ ビキニなんて絶対無理！」

全力で拒否するひかるに、美雪が呆れたように言う。

「何言ってるのひかる。女子高生はビキニよ！ それにせっかくの豪華客船クルーズな

んだから、ビキニくらい着なくちや」

「無理〜！」

「ほら、藍崎くんも喜ぶから」

「意味わかんない。なんで藍崎くんが喜ぶの？」

今ひかると美雪がいるのは、リゾートファッションの店だった。

いくつか店を回ってきたのだが、ひかるは美雪に言われるままに帽子やサンダル、サン

グラスやバッグを買わされた。

そして今は水着を見ているのだが、なかなか美雪のお眼鏡にかなうものがない。

そして彼女がようやく手に取ったのが、この黒のビキニだった。

豪華客船にはまるでテーマパークのようなプールがあるらしい。

だから水着やリゾートウェアを買いに來たわけだが、実のところひかるは、水着は手持

ちのスクール水着でいいし、服だつて今持つているTシャツとハーフパンツで十分じやな

いかと思つていた。

しかしそんなことを美雪が許すわけもなく。

黒のビキニを拒否すると、美雪は「じゃあこれは？ こっちは？」と色とりどりのビキ

ニをすすめてくる。

「だから。色や柄じゃなくて、ビキニが嫌なんだつてば！」

渋々ついてきたのにこんなことになって、今や全力で逃げたいひかるである。

結局ひかるは、上部分がストライプのタンクトップで下が茶色のトランクス型のタンキ

ニと、下がスカートになっているワンピース型の水着を購入した。

美雪が、毎日プールに行くのに一枚では足りないと言うからだ。

その美雪は、今日いビキニを試着中である。

ひかるは買ったものの袋を抱きしめ、充足感に浸つていた。

修学旅行のために、こんなに服や持ち物を新調したのは初めてだったのだ。

散財してしまったという罪悪感もあるのだが、紫野からも、墨島剣造の孫として恥ず

かしくない格好をするようにと言われていて、有り余る衣料費を送金されている。

もちろん今はまだひかるが墨島家直系の孫ということは秘匿されているのだが、いず

れ明るみに出たとしても恥ずかしくないように、と心がけてはいる。

どうやら美雪もビキニを二着買うことにしたようだ。

「あとは寄港地とか、船の中でも買えると思うから」

「えー、まだ水着買うつもりなの？」

「だって、島に着いてからだって必要でしょう？」

「それだって二枚あれば十分でしょ」

ひかると美雪はなんだかんだと話しながら会計を済ませ、出入り口に向かおうとした。するとその時、出会い頭に制服を着た少女が二人、店に入ってきた。

なんとなく見たことがある顔だから同じ学年かも……、と思いながら眺めていると、ひかるに気づいた少女たちがこちらに寄ってきた。

「ごきげんよう、黒川さん」

「ごきげんよう」

名前を知らないのでそう返して微笑んでみたが、相手は全く友好的ではない表情をしている。

ひかるの返事の仕方がバカにしているようにでも聞こえたのだろうか。

手前の女の子……仮に、少女Aとしよう……が目尻を吊り上げてこう言った。

「あなた、最近煌さまとの距離が近すぎるんじゃないやなくて？」

「え？ 距離……？」

ひかるはそう聞き返すと少し首を傾げた。

「まあ、席は近いけど……」

煌の席はひかるの後ろだから、確かに教室での席は近い。

「そうじゃなくて……。色々近いつて言ってるのよ。あなたの田舎臭が煌さまに移るから、もう少し遠慮なさったら？」

少女Aはイライラしたようにそう言った。

「そうよ。もつと身の程をわきまえなさいよ。煌さまの周りをウロチョロして、見苦しいったらないわ」

と少女Bも続く。

（うわ、久々）と思いながら、ひかるはまじまじと彼女たちを見た。

転校当初はこんなことをよく言われたが、最近は何と向かって罵ってくる人は減っていた。

なるほど彼女たちは煌のファンらしい。

激しく余計なお世話だと思うのだが、こういうのは言い返すと余計にこじれるので、ひ

かるは黙ってやり過ごすことにしている。

それに、なんて言っただけで黙ってくるのだろう、なんて、まるで他人事のように面白がつて
いる節もある。

「ちよつと、聞いているの？ 昴さまの遠縁とかが話だけど、それだって嘘なんじゃないの？ 眩しいものに撞いて近づきたい気持ちはわかるけど、あまりにも高嶺の花に手を
伸ばしすぎて、本当に見苦しいわ」

「ちよつと……！」

黙っているひかるを押しのけてぐいつと前に出たのは美雪である。

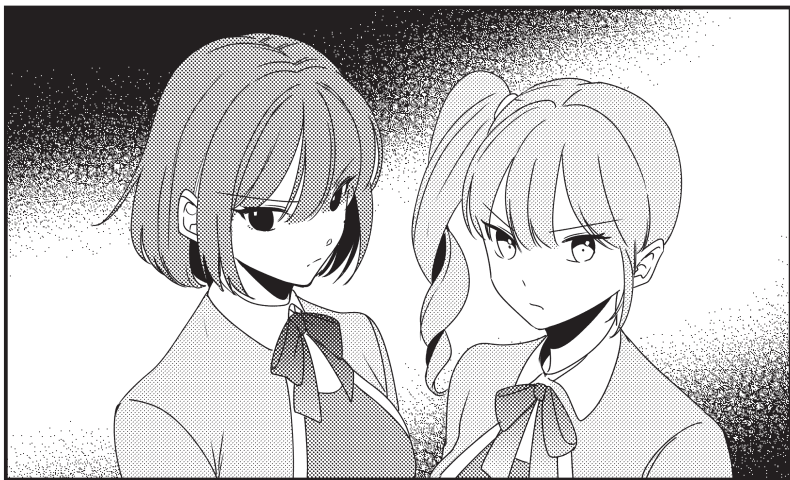
「いいから美雪。後ろにいて」

ひかるは美雪の服を掴んで止めようとしたのだが、美雪はさらに一歩前に出た。

「見苦しいのはどっちよ。嫉妬してあることないこと言っただけ。あー、見苦しい」

「うるさいわね。相田さんは関係ないでしょ？ 黙っていて」

「だって教えてあげないと可哀想だと思っただけ。何か勘違いしているみたいだけど、ひかるが藍崎くんの周りをウロチョロしてるんじゃないかって、藍崎くんが何かとひかるに寄ってくるんだからね？」



「なんですすって!? そんなこと、あるはずないでしょう!」

「そうよ! 舞踏会の時だって、何か汚い手を使ってパートナーに収まったのでしょうか? 修旅での舞踏会でも煌さまにエスコートさせたりしたら、今度こそ許さないわよ?」

なるほど。一番言いたかったのはどうやらこれらしい。

クルーズ最後の夜には、仮面舞踏会が予定されている。

特にベアで入場する規定はないのだが、今から牽制しようというところなのだろう。

「ふん、自分が選ばれないからって嫉妬しちゃって。醜いわねー。藍崎くんだって可哀想」

「なんですすって!?」

「美雪、お願いだから煽らないで」

ひかるは美雪の腕をぐいっと引くと、その勢いのまま店を出た。

後ろでまだAとBが何やら言っているが、もう知ったことではない。

「もー、美雪が興奮してどうするのよ。あんなの、黙ってやり過ぎればいいのに」

「黙っていたらいい気になってエスカレートするだけよ。全く、モテる女は辛いわね、ひかる」

「モテてないから。……ところで、あの人たちが誰なの?」

「ええ? 知らないで話していたの?」

美雪の話によると、先程の少女Aは元木紀子、少女Bは須藤有紗という名前らしい。

二人とも隣のクラスで、幼稚舎から墨島学園に通う生粋のお嬢様だ。

「藍崎くんのファンの中でも過激派で有名な二人だから、ひかるのこと、ずっと苦々しく思ってたんじゃない? 偶然お店で本人に会って、我慢できなくなっちゃったんでしょ

うね」

「過激派って……何それ、怖い」

「藍崎くんも大変よね、自分の知らないところで牽制されて。まあ、あの二人は認識も

されてなさそうだけど」

可愛い顔をして、美雪が毒を吐いている。

でも……

「庇ってくれてありがと、美雪」

「ふふ、どういたしまして」

ひかるは礼を言うと、美雪と顔を見合わせて笑ったのだった。

幕間 生徒会室にて①

墨島学園高等部では、クリスマスから年始にかけて、一、二年生の修学旅行がある。豪華客船を貸し切ったのクルーズはもちろん生徒会主導で行われ、昴たち生徒会メンバーは今その準備で目が回るほど忙しい。

墨島学園独自の方針で、学校行事等は全て生徒会が運営しているからだ。後期中間考査も終わった今、生徒たちの話題は修旅のことばかり。

超セレブ校らしく船上クリスマスパーティ、年越し仮面舞踏会なども開催されるため、その衣装の準備などにも忙しいのだ。

昴たち生徒会メンバーだって自分自身の用意があるのだが、とてもじゃないが手が回らない状態だった。

そんなある日の放課後。

生徒会の紅一点、緑山さおりが少々渋い顔で生徒会室に現れた。

そして、一通の封筒を昴たちの前に差し出した。

「これ、昨夜ひかるさんの部屋の前に置かれていたわ」

宛名の面に『黒川ひかるへ』とだけ書いてある、なんの変哲もないただの白い封筒だ。裏を見ても、差出人の名前はない。

まだ封も切っていないその封筒を見て、昴は首を傾げた。

「いやいや、何しれつと言ってるの、さおり。ひかるちゃん宛ての手紙持つてきちゃダメでしょ」

「そう？ でも中身を見たら、きつと昴は私の判断を支持すると思うわ」

「どういうこと？」

「昨夜見回りの時に、ひかるさんの部屋の前でうろろしている子を見つけたの。怪しいと思って隠れて見ていたら、ドアの前にその手紙を置いていったのよ」

寮には寮監もいるのだが、女子寮の寮長であるさおりは、自主的に見回りを行っている。セレブ校の女子寮はもちろんセキュリティもトップレベルだから、さおりが気をつかうのは主に生徒間のトラブルなどである。

「それで、どうして怪しいと思ったの？ ラブレターかもしれないじゃん」

泉が面白そうに言うのを、さおりが横目で睨んだ。

「だってその手紙置いていったの、元木紀子さんだったんだもの」

「え!？」

「は!？」

昂、泉、そして黙って聞いていた煌と獺も、一斉にさおりを見た。

「たしかに……。それは好意的な手紙とは思えないな」

元木紀子と言えば、煌の熱狂的ファンの一人として生徒会内でも知られていた。

また、先日ひかるに言いがかりをつけて絡んでいた女生徒としても、すでに耳に入っている。

あの場面を目撃した生徒たちも少なからずいたからだ。

「この手紙のこと……。ひかるちゃんには?」

「まだ何も言っていないわ」

「仕方ない……。開けてみるか」

昂は慎重に、手紙の封を開けた。

そしてぺらりと一枚だけ入っていた便箋には、こう書かれていた。

『おまえの秘密は知っている。ばらされたくなければ生徒会から離れろ』

「秘密……」

脅迫状めいたその手紙に、昂は眉をひそめた。

「生徒会について書いてあるけど、ようするに煌から離れろってことだよな」

「まあ、置いたのが元木紀子ならそういうことなんだろうな」

泉と獺がそう言っ煌の方に目をやった。

煌は唇を噛みしめ、黙ってその手紙を睨みつけている。

「で、どうするの? 昂。ひかるさんにはこ

のまま黙っておくの?」

「そうだな。この『秘密』っていうのが何を

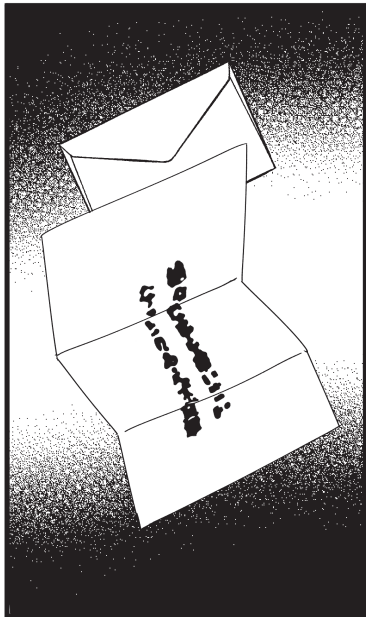
指すのかわからない以上、下手に動けないし

なあ」

「秘密ね……」

「まあ、秘密っていうのが、ひかるちゃんが

ヴァンパイアの混血種だったことではなさそ



うだけどね」

「そうだろうな。元木紀子自身、混血種だからな」

黒川ひかるには……、いや、ひかるは元より、墨島学園には大きな秘密がある。

国内有数のセレブ校である墨島学園を創設したのは、旧財閥の家柄を誇り、現在も政財界に大きな力を持つ墨島家だ。

そしてその墨島家は、ヴァンパイア界の頂点に立つ一族でもある。

いつの時代からか日本に住み着いていたヴァンパイアの多くは、人間を襲って恐れられ迫害されるよりも、人間社会に溶け込み、共存する道を選んできた。

それらを穏健派ヴァンパイアと呼び、彼らを率いてきたのが、墨島一族なのである。

現在墨島家は金融、交通、建築とあらゆる事業を展開するグループのトップであり、その墨島家が、ヴァンパイアが人間界で上手に生きていけるためにと創設したのが、墨島学園だった。

だから今や超難関、超セレブ校として有名になった墨島学園には、今もヴァンパイアが人間に紛れて通っている。

そしてヴァンパイアの秘密を守りながら学園を自治運営しているのが代々の生徒会であ

り、当代は昴たちなのである。

その生徒会だけが知っている事実が、黒川ひかるは、実は墨島グループ総裁墨島剣造の唯一の孫だということだ。

ようするに、ひかる自身、ヴァンパイアの血を引いている。

秘密にされているのは、墨島グループ総裁直系の身分が明らかになった時の世間の反応からひかるを守るためである。

また、ひかるの体にはもう一つ特別な血が流れている。

父方の血、来守一族の血だ。

来守一族はヴァンパイアに好まれる血を持ち、穏健派ヴァンパイアに保護され、共存して生きてきた一族である。

その分『はぐれもの』と呼ばれる享乐的なヴァンパイアに狙われやすく、ひかるのルーツを秘匿するもう一つの理由になっていた。

約四ヶ月前に起きた事件も、このひかるの特別な血と身分に起因している。

だからこの事実を知るのは、生徒会メンバーとごく一部のヴァンパイアだけなのである。「とにかく、『秘密』の意味がわからない以上、ひかるちゃんには内緒で探ろう。変に不

安を煽っても可哀想だし、最近(さいきん)は友達(ともだち)も増えてすごく楽(たの)しそうにしているしね。煌(こう)と獏(ぼく)は同じ(おな)クラスだから、よりいつそう気(き)にかけてあげて」

「うん」

「わかつてる」

昴(すばる)の言葉(ことば)に、獏(ぼく)、そして煌(こう)がうなづく。

「それにしても、煌(こう)のファンって結構(けっこう)過激(かげき)だよな。しかも墨島(すみじま)グループの重鎮(じゅうちん)の家の令嬢(れいじょう)が多いし。ひかるちゃん(おお)が墨島(すみじま)剣造(けんぞう)の孫(まご)だと知(し)ったら大慌(おおあわ)てだね」

「俺(おれ)の家(いえ)と結びつきたい家(いえ)の連中(れんちゆう)ばかりだよ」

泉(いずみ)にからかうように言(い)われ、煌(こう)は面白(おもしろ)くなさそうに顔(かお)をそらした。

煌(こう)の実家(じけ)である藍崎(あいざき)家は、墨島(すみじま)グループで墨島(すみじま)本家(ほんけ)に次(つ)ぐ程(ほど)の存在感(そんざいかん)を放(はな)っている。

昴(すばる)と並(なら)んで花婿(はなむこ)候補(こうほ)として挙げ(あ)げられているのは仕方(しかた)のないことだ。

「だからって黒川(くろかわ)を利用(りよう)するようなのはするなよ」

珍(めず)しく獏(ぼく)がそんな発言(はつげん)をしたため、煌(こう)はじろりと彼(かれ)を睨(にら)んだ。

「どういう意味(いみ)だ。俺(おれ)は黒川(くろかわ)を利用(りよう)したことなんてない」

「そうは言(い)っても、今(いま)まで全(まった)く女(おんな)の子(こ)に興味(きょうみ)がなかった煌(こう)がやたらと黒川(くろかわ)に絡(から)むのは、女(おんな)

除(よ)けの意味(いみ)もあるんだろ？」

「は？」

「それに、彼女(かのじよ)が墨島(すみじま)総裁(そうさい)直系(けいけい)の孫(まご)だからっていう下心(したこころ)はおまえだって……」

「おまえ……!!」

「こらこら」

煌(こう)が立ち上(あ)がって獏(ぼく)につかみかかろうとしたところに、昴(すばる)が割(わ)って入(はい)った。

「仲間内(仲間内)で喧嘩(けんか)しないの」

「でも、実際(じつじ)黒川(くろかわ)が脅迫(きょうぱく)状態(じょうたい)なんか送(おく)られてるのは、煌(こう)が黒川(くろかわ)にだけ興味(きょうみ)を示(しめ)すからだ。お

まえのせいだろ？」

「ちっ」

煌(こう)は軽(かる)く舌打(したう)すると、生徒会室(せいとくかいしつ)を出(で)ていつてしまった。

「あーあ、怒(おこ)つちやった。獏(ぼく)、煽(あお)りすぎだ」

「僕は本(ほん)当(とう)のこと言(い)っただけだ」

昴(すばる)は一つため息(いき)をつく、煌(こう)が出(で)ていったドア(ドア)の方に目(め)をやり、呟(つぶや)いた。

「修旅(しゅうりょ)で何(なに)もないといいけどな……」

第二章 修学旅行

大型豪華クルーズ船での、墨島学園高等部修学旅行が始まった。

船のエントランスは豪華なシャンデリアに照らされ、大階段が広がる様はまるでどこかの宮殿のようだ。

船内にはいくつものレストラン、ショップの他、シアターやゲームセンターなどアミューズメントパークのような光景も広がっている。

また、デッキには大小いくつものプールを備え、それもまたテーマパークのようだった。豪華クルーズ船は、海の上を動く高級リゾートのようなものなのだ。

生徒たちはそれぞれ自分の部屋に落ち着くと、早速船内の探検を始めた。早くも水着に着替えてプールで遊んでいる者もいる。

ひかるもまた、美雪や月子、奏絵たちと一緒に早速プールに向かった。

何本ものウォータースライダーを目にした時から、早く遊びたくて仕方がなかったのだ。

今日のひかるの水着は、先日美雪に見立ててもらったタンキニだ。

『日焼けが怖い』とプールサイドのパラソルの下にしようとする美雪を引っ張り、ひかるたちは何度もスライダーの列に並んだのだった。

プールサイドには女の子たちの塊があちこちに見られ、その中心には生徒会メンバーの姿がある。

にこやかに対応している昴に対し、仏頂面で輪の中心にいる煌の顔がちよつと笑える。

「なんだ、昴さまたち上着着てるのね」

奏絵がつまらなそうにそう言った。

昴も煌も水着を着てはいるようだが、上はパーカーを羽織っている。

プールに遊びに来たというより見回りに来たという感じだが、ヴァンパイアはあまり日光に強くないとも聞いているから、日焼け対策でもあるのだろう。

「昴さまも藍崎くんも細身だけど、脱いだらいい筋肉してると思うのよね」

奏絵がそう言って彼らの方に目をやった。

「ちよつと、親衛隊とかに聞かれたら大変」

「それより今の、超セレブ校の学生らしからぬ発言じゃない？」

「だって私は庶民だし」
たしかにお嬢様育ちの美雪以外は、皆庶民出身だ。

月子と奏絵は特待生だし、ひかるはつい数か月前まで田舎の女子高生だった。しかしこの中で一番令嬢らしからぬ発言をするのは、実は美雪だったりする。

「私、お坊ちゃまの筋肉には興味ないの。それより、私好みの筋肉はどこかしら」
目を皿のようにしてプールを見つめる美雪は、獲物を狙う獵師のようである。

「出たよ、美雪のマッチョ好き」

「ええ。私好みの筋肉を持つお方だったら、付き合って差し上げてもいいわ」

「ぶっ」

美雪の上から発言に、ひかるたちは笑い出した。

美雪のマッチョ好きは仲間内では有名な。

いわゆる細マッチョではなく、ボディビルダーのようなムキムキでもなく、ラグーマンや柔道選手のような体型が好きだと言うのだが、ひかるたちには違いがよくわからない。だいたい、学業特待生以外はどこぞのご令息ばかりの墨島学園では、滅多にお目にかかれない種類の男子なのである。

筋肉ウォッチングを始めた美雪と奏絵をプールサイドに残し、ひかるは月子を誘ってスライダー巡りを続けた。

そして何度目かに長めのチューブスライダーに並んだ時、若い男性スタッフがチューブを渡しながらかた話しかけてきた。

「君、黒川ひかるさん……だよね？」

「……え？」

なぜか自分を知っているように話しかけてきたスタッフを、ひかるは当然のように警戒した。

しかしスタッフは笑顔で、

「ああ、警戒しないで。俺は墨島学園高等部の卒業生だから」

と言った。

「卒業生？」

「うん。今は墨島大学の学生で、今回はバイトスタッフとして船に乗ってるんだ。白井融といいます」



「学校の先輩？ でも、どうして私のこと……？」

「墨島昂の遠縁の子が高等部に転校してきたっていう噂は大学部にも聞こえてきててね。わりとみんな興味津々だったんだ」

「何それ、怖い」

「自分の知らないところで興味を持たれているなんて聞かされて、あまり気持ちのいいものではない。」

しかしそれが、墨島家の縁者であるということなのだろう。

「それで、私に何か？」

「うん。黒川さんって墨島グループの年始のパーティに参加する？ もしするなら、俺にエスコートさせてもらえないかと思って」

「エスコート……？」

ひかるは驚いてまじまじと白井の顔を見た。

クルーズの到着先のリゾートで墨島グループの年始パーティが開かれることは知っていたが、そもそもひかるが参加する予定はない。

それに初対面であるこの人が、なぜこんなことを言うのだろう。

不思議に思っけて口を開きかけたひかるの視界が、突然黒い影に覆われた。

「うちの生徒をナンパするのはやめてもらえますか？」

そう言っけてひかるを庇うように立ちふさがったのは、藍崎煌である。

「うわ、用心棒がいたんだ、残念」

白井はおどけるように両手を挙げてみせた。

煌はそんな白井を睨みつける。

「スタッフが修旅中の女子学生をナンパとか、おかしいだろ。ちゃんと仕事しろよ」

「おー、怖い怖い」

「ほら、行くぞ黒川」

「え？」

煌はひかるが持つていたチューブを奪うように持ち、もう一方の手でひかるの手首をつかむと、そのまま歩き出す。

「え？　ちよつと待ってよ藍崎くん。私スライダーに並んで……！」

「あつちのスライダーにしろ。これそのまま使えるだろ？」

引つ張られながらも振り返ると、なぜか月子が笑顔で手を振っている。

「え？　月子……？」

「私もう戻るから楽しんできて〜」

「でもこれ二人乗り……！」

「どうぞお二人で〜」

煌は別のスライダーの列にひかるを連れていくと、そのまま自分も一緒に並んだ。

チューブは穴が二つある二人乗り専用のものだ。

「まさか……、藍崎くん私と乗るつもり？」

「いいだろ？　俺ずつと巡回で遊べなかつたんだ」

（だからって私と乗らなくても……！）

と叫びたかつたのだが、いつもは仏頂面の煌がスライダーを見てなんとなく目をキラキラさせているのを感じたひかるは、結局何も言えなくなってしまった。

その後煌は二人乗りのチューブの前にひかるを乗せ、自分は後ろに乗った。

もちろん途中でパーカーは脱いでいて、肌は密着するし、ひかるはスライダーに乗るワクワク感よりドキドキの方が勝ってしまったのだった。

「ひかる、藍崎くんと、ずいぶん楽しそうだったね〜」

「ねー、あれでまだ付き合ってないとか、信じられない」

夕食の席で、ひかるは美雪たちから揶揄われていた。

煌と二人乗りのスライダーに乗ったことをだ。

正直乗るまではすごく恥ずかしくてドキドキしていたのだが、滑り出したものすごく楽しくて、恥ずかしさなんて飛んでしまっていた。

やっぱり男の子と一緒だと、全然スピードとスリルが違うのだ。

もちろん月子と乗っていた時だつて楽しかったのだが、煌の操縦のせいというか、コーワークのせいというか、スピードがどんどん増してスリル満点だった。気づけば今度はひかるの方が煌の手を引っ張り、「もう一回、もう一回」とねだつてしまつていたのだから。

もちろん煌とひかるの二人乗りは多くの目にさらされ、当然煌のファンたちからは白い目で見られていた。

レストランに入ってくる時だつて、今こうして食事をしている間にだつて、突き刺さるような視線を受けているのは感じている。

しかしその視線の中でも、特に強い光を放つ二人の瞳を、ひかるはこの時まで知らなかった。

幕間 生徒会室で②

生徒会は修学旅行の最中、客室の一つを生徒会室として使用している。メンバーは夕食後に集合し、修旅一日目の報告を行っていた。

煌、今日はうまいことやつたな」

「何が？」

「プールでひかるちゃんと密着してたじゃん」

プールでの出来事で、煌は泉にからかわれていた。

「スライダーやつただけだろ」

「ファンを煽るようなことするなつて言われてたのに」

「しょうがないだろ。黒川のやつ、ナンパされてたんだから」

「ああ、それも墨島グループの若きブレン候補にね」

そう苦々しげに言つたのは昴だ。